役員エッセイ

# 大通公園を望む窓辺から

## 発熱外来奮闘記

常任理事　水谷　匡宏

厚労省を皮切りに度重なる地域の行政機関の要請を受け、当院でも昨年秋から時間的、空間的分離を原則として、PCR検査を含む発熱外来を急遽開設した。新規の事業となれば多少なりとも難題が生じるのが世の常であるが、今回の件でもすんなりとスタッフから十分な理解と協力を得ることができなかった。結局、専任職員の増員と院内の防菌対策を徹底することで了解が得られ、何とかスタートを切ることができた。開始後は毎月50人ほどの発熱患者の診察を続けた。これまで平均で約１割程度のコロナ陽性患者を扱ったが、幸いにもクラスター化はなく、職員全員みな無事に勤務を続けている。しかし今年５月の大型連休明けの第４波の流行期にはコロナ陽性患者の急増をまともに受け、足元にも濃厚感染の危険が迫ってきたため不本意ながら発熱外来を急遽閉じることにした。この時脳裏をかすめたことは、万一休業に追い込まれた時の休業補償の申請方法や補償金について、全く情報を共有しておらず、先行き不安でいっぱいであった。

６月に入り感染者の減少と緊急事態宣言からまん延防止等重点措置へ移行したことで１ヵ月ぶりに再開した。それと前後して今度は新たにコロナワクチンの接種業務が加わってきた。そのため、さらにワクチン担当係を２人増員した。厚労省の方式に従い、週100回以上の接種を５月下旬から開始した。当院のかかりつけ患者と共に接種券を保有している一般人にも対象を広げた。ところがワクチン供給の先細りから急遽予約の練り直しや電話応対など無駄な労力を費やす羽目になった。しかも報酬面で想定外なのは令和２年度の厚労省分の発熱外来特別補助金の給付（支払い）が遅延したままなことである。どのように全国の各医療機関に給付が開始されたかは定かではない。おそらく内科標榜医療機関は後回しにされ、小児科を優先的にしたのではと推定している。そこには政治的な圧力があったのではないかと思っている。今回厚労省にその問い合わせをしたところ、全国から多くの苦情を受け、迷惑をかけているが、「支払いはもう少々お待ちください、ない袖は振れません」などと冷めた対応であった。これでは現場で頑張っている我々医療者のやる気は低下する一方で、頭の痛い話である。

## 父の言葉

理事　奥村　利勝

私の父は昭和２年生まれで、６年前に他界しておりますが、幾つか忘れられない言葉があります。酒が強く仕事は真面目な外科医でありました。私は父にいろいろなことを相談するようなこともなく、医師になり、これまでやってきたと思ってますが、振り返ると大きく父の影響を受けていると最近感じています。

自分が卒後内科にするか外科にするか迷っていた時も、「外科に行け」と言われていたら迷わず外科に行くつもりで父の意見を聞きました。しかし父は私に「内科の方がいい」「……だから」。「…」は多方面に影響が大きいので割愛します。自分が外科医なのに、そんなこと言うとは最初は理解できませんでしたが、結局内科に進んだ私は、今になって父の言葉の真意が分かったような気がします。

いつどの場面かは忘れましたが、多分今から10年くらい前、父が「男には負けると分かっていても、やらなきゃいけない時がある」と言ったことを記憶してます。負け試合をするバカはいないと負け試合にはそもそも立ち向かわないことも大人の選択であろうかと思いますが、守るものが大きいほど人は負け試合にどう向き合うのか悩みます。自分の人生を振り返ると、この父の「男には……」の言葉が何度か私を突き動かしています。

父は酒が強く毎日飲酒で、反対に私は酒が弱く父と飲酒することは父が亡くなる数年前までほぼありませんでした。10年くらい前に、海外旅行帰りの研修医からもらったお土産の芋焼酎（飛行機の中で買った）が口に合い、それから晩酌で芋焼酎にはまってます。その頃父は体調も下降気味でだんだん酒が飲めなくなってきました。父と酒を飲んだことは数えるほどで、本当に使えない息子です。もっと一緒に父と酒を飲んでいたら、私の人生を変える父の言葉が聞けたのかもしれません。